

## 潮騒通信「どっこい生きてます！」

## 高齢の依存症者にも高齢者なりの回復の姿がある

今年も1年を振り返る時期を迎えました。3・11東日本大地震と大津波、直後の福島原発事故の惨劇は、歴史の転換点として人類共通の教訓としなければなりません。潮騒JTCも被災しましたが、苦しい時こそダルク精神を発揮しようと被災者への入浴施設の無料開放や鹿嶋市の給水ボランティアなどで地域貢献ができ、今年は入寮者らの秘めたるマンパワーを思い知りました。

そして11月27日には第2回フォーラムを約250人の参加者を得て成功裏に終わることができました。来賓の方々の潮騒に対する熱い期待を受け止め、講師の皆様には時宜を得たテーマで話をさせていただき、施設運営にヒントを得ました。入寮者有志のライブ演奏パフォーマンスも日頃の練習成果を発揮してくれました。肝心の私の閉会あいさつでは年甲斐もなく頭が真っ白になり、言葉に詰まる醜態をさらしてしまいました。日々のミーティングとは異なり、施設長らしくいい所を見せようと背伸びして自分の言葉を見失ってしまったのです。私たちアディクトは人前で恥をかいた分だけ回復できるといわれますが、私はクリーン9年でもまだまだ人前で恥をかく体験が足りないと自覚させられました。

逆に、参加者の当日アンケートでは嘘偽りのない入寮者の体験談がストレートに心に響いた、との好意的な意見が多数ありました。特に70代の高齢入寮者が「刑務所とシャバの往復だった自分の人生が潮騒で助けられた。行き場のない私には終(つい)の棲家となる貴重な居場所」という発言をしてくれ、私も胸が熱くなりました。当初、スピーカーとして声を掛けていなかったのですが、講師の話に刺激を受け、自分からぜひ話させてほしいと願い出てきたのです。

私はダルクで助けられ、60歳で回復できた「奇跡」を踏まえ、形や常識、規則に囚われない懐の深いダルク精神に忠実でありたいと願い、これを施設運営の基本とし、「できるだけハードルを低くして高齢者も見捨てない」をモットーにしています。そのことが一部で誤解や曲解を生み、「潮騒は生活保護をつけるために依存症とは無縁な高齢のホームレスを無理やり新宿で拾い集め、あくどい生保ビジネスをしている。あれはダルクではない」という、いわれのない悪意や中傷にさらされています。確かに回復率を考えれば、比較的若くて単一の依存症だけの人たちを選別して入寮させる方がいいに決まっています。でも、これだといくつも問題を抱える高齢のアディクトたちは救われません。行き場のない高齢アディクトも回復する権利はあるはずです。ノウハウのない手探りの試みだとしても、潮騒JTCでは高齢者なりの回復の姿を模索していきたいと考えています。

(施設長 栗原 豊)

SJTC

SHIOSAI JOB TRAINING CENTER

2011年

12月号 一部100円

## Contents

- P1 高齢者なりの回復の姿を
- P2 第2回フォーラム終わる
- P3 第2回フォーラム特集1
- P4 第2回フォーラム特集2
- P5 第2回フォーラム特集3
- P6 第2回フォーラム特集4
- P7 追悼・ロス&誕生日



# 天国に響け!“回復と希望”のメッセージ!!

「潮騒JTC第2回フォーラム」開催＝11月27日、行方市＝

～各地から250人が参加、成功裏に終了～



～講話、バンド演奏、仲間のスピーチ…～

## ★『「回復と希望」～今、この時を乗り越える』をテーマに盛り上がる★

NPO法人・潮騒ジョブトレーニングセンターは11月27日、茨城県行方市宇崎の北浦湖畔にある県関係施設（レイクエコー）で第2回公開フォーラムを開き、全国から延べ250人が参加して講演や体験発表、入寮者によるバンド演奏などで盛り上がり、今年も成功裏に終えることができました。当日参加された皆様やフォーラム実現にご尽力をいただいた各方面の協力者の皆様に、改めて感謝を申し上げます。

フォーラムは潮騒JTC最大のイベントで、約1年間の準備期間を経て施設を挙げて取り組みました。今年は『「回復と希望」～今、この時を乗り越える』をテーマとしました。講師陣は初回だった前年と同じ顔ぶれでしたが、それぞれの話の内容はバラエティーに富んでいて、時代の病理とされる「依存症」の実態や回復の在り方などで参加者にヒントを与えてくれました。千葉県でも数少ないアルコール専門病棟を持つ秋元病院（鎌ヶ谷市）の精神科医、秋元豊理事長は「医者が直せない患者が、なぜか潮騒では治ってしまう」と明言。アルコール依存症治療では謙虚に医師の力の限界を指摘し、医療や福祉、中間施設などの総合的な連携を求めました。

水戸保護観察所の荒木龍彦所長やNPO法人・アジア太平洋地域アディクション研究所（略称・アパリ）の尾田真言事務局長は、それぞれ専門家の立場から刑務所へのメッセージ活動などダルクの司法アプローチを評価していました。その上で国が初犯の薬物事犯者らに対して社会内での処遇（刑の一部執行猶予制）の道を開きつつある流れを紹介し、その背景にダルクの存在がもはや無視できない現実となっていることを強調しました。その一方で尾田氏は、法規制や取り締まり（「ダメ。ゼッタイ」運動も）は国の仕事として意味があることも強調していました。

メインゲストのダルク創始者、近藤恒夫さん（日本ダルク代表、アパリ理事長）は「当事者が回復することで仲間が助けられるのがダルク。医師や先生、親が治せる程度の段階なら、そもそも依存症ではない。彼らが治せない患者が治るのがダルクだ」との自負を示しました。さらに「“居たい人は居て、出たい人はどうぞ”がダルクのスタンス。よくダルクでの回復率は何%かと聞かれるが、ぼくは“分からない”と答えている。それを決めるのは社会だから」と深いレベルで依存症の回復について問題提起をしてくれました。また、全国のダルクが回復率を求める国の動きになびくことで金太郎アメのように「同じ顔」になることに懸念を示し、ダルクの原点を見失わないようにと貴重な提言をしてくれました。

このほか潮騒JTCに理解を示す坪倉洋一横浜ダルク代表や三浦陽二沖縄ダルク代表らも薬物依存症の当事者として話をしてくれました。また、潮騒入寮者メンバーも自らの体験についてスピーチし、アルコールやギャンブル依存の実態を浮き彫りにしました。この日のために練習に励んだ音楽メンバーもライブ感覚あふれるバンド演奏で舞台を盛り上げてくれました。閉会あいさつで栗原施設長は「今は基礎固めの時期。地域に根を張れるよう今後も地道に努力していきます。夢は膨らみますが、自分たちの足元を見つめて等身大の回復に努めていきます」と締めくくり、第2回フォーラムを閉じました。（イチ）

# 第2回フォーラム特集1



来賓席



終始、周囲を気づかいながらステージを見守った栗原施設

ラストには客席から施設内外の大勢の仲間が登壇し、回復の素晴らしさを訴えました

依存症の今についてご講演いただいた、APARI 事務局長の尾田真言氏、秋元病院理事長の秋元豊氏、水戸保護観察所長の荒木龍彦氏（左から）



## ◆司会の大役を無事こなし充足感◆

午後の部からの司会を担当させてもらいました。事前に司会進行の台本が準備され手渡され、前日のリハーサルに臨みました。リハーサル時には言葉はスラスラと出ましたが、本番になると手に汗をかき、口が渇き、ロレツがよく回らなくなってしまいました。進行する直前で予定変更があったため戸惑ってしまうところも多く、今この部分を進行中なのか、判断が難しくなる場面もありました。しかし大きなトラブルもなくよかったです。以前、AA に行った時に知り合った方が来場してくれていて、AA ステップセミナーでの司会よりも、スムーズにできていたと評価されたことがうれしかったです。すったもんだありましたが、『終わりよければすべてよし』。プレッシャーから解放され、今年も良い締めくくりを迎えられそうです。

(リュウジ)

## ◆仲間たちとともに歌った追悼曲に感動◆

施設に入って2回目のフォーラムでした。昨年の第1回フォーラムも楽しかったけど、今回も音楽や色々な話があって楽しかった。みんなが舞台上がり、死んでしまった仲間へ贈った追悼曲と一緒に歌った時は、自分ながら感動しました。「まあ、何はともあれ」色々なハプニングもあったけど無事うまく行って良かったので、次回はもっと上手くいけばいいと思う「今日一日」です。

(タツヤ)



講話する坪倉洋一横浜ダルク代表、近藤恒夫日本ダルク代表、三浦陽二沖縄ダルク代表（左から）

◆仲間たちの回復への『努力』の積み重ねを実感◆

自分は受付や映像担当、弁当係りと多くの事を手伝い会場を汗かきながら走ったフォーラムでした。こうした大役は自分一人ではまぎならず無理でした。仲間がすぐ側に居てくれたお陰でがんばれました。仲間の体験談の突然のスピーカー要請には、本当に「えっ？」と思いましたが、一人目で何も考えて無かったけれども、自助会や施設でのミーティングで培った話し方のお陰で無事に10分話せました。仲間のバンド演奏はすごく出来上がっていて「素晴らしい」と思いました。一日一日の積み重ねがこんなにも力を付けるのだと、「努力」という言葉が良く合うと思えました。回復もそうだと思います。今の状態に満足せず、頑張りたいと思います。（シュウ）



カン（右）らが中心となり育て、フォーラム来場者に無料配布した花の苗も好評でした

◆皆で歌い踊ったステージで、仲間たちとの絆の深まりを再確認◆

前日から皆で準備を始めて夜までリハーサルをこなし、なんとか当日を迎えることができました。来賓の方々のあいさつ、秋元病院の秋元豊氏らの話があり、私にはとてもよい勉強の時間となりました。仲間の体験スピーチでは、私も話させていただきました。震災時に仲間とともに市役所で給水ボランティアをしていた際に、子供やお年寄りから「ありがとう」と言われ、今までの感謝されたことなどほとんどない人生だったので、とてもうれしかったこと、酒を飲んでばかりの30代の時、フィリピンパブでお金をばらまいて、自分が女性にもてていると大きな勘違い人生を送っていたこと、ホームレスまで落ちぶれ、生活保護の生活を繰り返し、「生きていくことがどうにもならなくなった」こと、酒がやめられなくて人生を壊していた時に栗原施設長と出会い、今は1年7カ月クリーンを続けられていること…。実の兄弟より強い絆で結ばれ、今日一日を大切に“頑張らない”で歩んでいることなど、今の思いをすべて話すことができました。ほかの仲間の話も感動的でした。午後には入寮者パフォーマンスでバンド演奏があり、以前この施設にいた仲間も友情出演し、最後には施設内外の多くの仲間が舞台に上がり、全員で歌って踊りました。今まで以上に強い絆が深まったひと時となったと思います。最後には栗原施設長のあいさつがあり、この日までのことがいろいろと思い起こされ、胸が熱くなりました。私はこれからも、仲間を大切にしていき、クリーンを続けて、社会復帰を目指して希望を持ち、仲間とともに「ミーティング命」「プログラム命」、そして「清く、正しく、美しく」をモットーにいくら生活が貧しくとも、ここで培ったダルク精神を忘れずに命ある限り、神様から頂いた“生きる”という使命を全うする覚悟です！

（タカ）

## 【第2回フォーラム特集3】

## ◆亡くなった仲間に全力で追悼の演奏◆

今回のフォーラムではバンド演奏をしましたが、色々な事がありました。まずバンドメンバーの死。自分は「フォーラムなんかやっている場合いじゃねーだろう！」と思いましたが、まあ~やると言う事だったので、やるなら仲間の追悼の意を込め精一杯やろうと決めました。演奏自体はトラブルの連続。自分の機材の電源が仲間に抜かれて、自分がその仲間をつまみ出したシーンがあったのですが…。うちのバンドはこれから上達すると思われるので、応援よろしく。（カン）



入寮者パフォーマンスで、練習の成果を発揮した『潮騒オールスターズ』=ジョー、カン、ヒトシ、タツヤ、カイ、タケシ、横浜ダルクから特別出演のギタリストのノビ（上列右から）



## ◆逃亡~そして温かい、本当の居場所の再発見~◆

第2回潮騒フォーラム、自分は逃げました。家族、仲間、ステージ、自分自身、仲間の死、みんなが一丸となつてのフォーラム。自分だけ逃げて薬物を使ってしまいました。もう取り返しのつかない事をしてしまった。許されない。“コレ（薬物）を使ってから死のう…”。でも心は仲間から離れませんでした。“やはり帰るべきなんだ、必死に謝ろう…”逃亡3日目。フォーラムが終わった頃、施設に帰りました。“どうしよう、許してくれないだろうな、きっと”体を震わせながら皆の帰りを待ちました。そんな僕を、帰ってきた仲間はこう言ってくれたのです。「生きていてくれて、ありがとう」。仲間に解放されると、僕は強く思いました。“もう逃げない”。そこには今までピンとこなかった、自分の『居場所』というものがありました。なんて温かくてイゴチの良い場所なんだ。“This is Love.”。みんなありがとう。（エン）

【第2回フォーラム特集4】

1998年10月9日第三種郵便物認可（毎月3回8の日発行）

2011年12月26日発行 S S K U 増刊通巻第4038号



# We Miss You, ロス!!

追悼・ロス～あなたの大きな愛と命の尊さのメッセージは永遠に…

今年6月から入寮し、アルコール依存症の回復に日々励んでいたロス（ネパール人）が、11月23日に施設敷地内で自ら命を絶ちました。重いアルコール依存症との格闘の末でしたが、それは唐突な死でもありました。

ロスは潮騒JTC初の外国人入寮者で、様々な事情から行き場を失い、当施設がチャリティーで今年6月から受け入れている仲間でした。母国語はもちろん英語と日本語を流暢に駆使し、天性の明るさと人懐っこさに加え、母国から持ち込んだジェンベ（アフリカンドラム）、ドラム、ダンスと豊かな才能を施設の音楽活動で存分に発揮してくれました。国境を越えて愛される存在で、施設に新風をもたらしてくれるムードメーカーでもありました。各種依存症を「今日一日」乗り越えて行こうとする入寮者に「回復を目指す仲間に国境はない」ことを伝え、新たな視野を開かせてくれる存在でした。しかし母国での生活から継続する彼のアルコール問題の根は深く、スリップ（再飲酒）と入退院を繰り返した末の死でした。12月7日には、来日したロスのご遺族や入寮者仲間が多数参列して、最後の別れを惜しみました。施設としては深い悲しみの渦中でフォーラムを開くべきか迷いましたが、彼が残した「依存症という病」の恐ろしさ乗り越えていく意味からも彼の死を無駄にせず、残された入寮者たちへの死を賭しての回復に向けたメッセージとして受け止め、開催を決意しました。当日はロスの遺影が掲げられたステージで、天国の彼に捧げられ楽曲が仲間たちによってライブ演奏されました。それらはすべて彼が私達に伝えたドラムのリズム、ビートが柱になっています。彼の残したメッセージはドラムのリズムとして、彼の魂の“鼓動”として、施設を越えて多くの仲間に響き渡り、永遠に刻まれたと私達は信じています。彼の死を契機に、私達は今日も謙虚に回復を目指そうと、誓いを新たにしています。心から冥福を祈ります。（カイ）



葬儀にはご遺族や仲間が多数参列し、別れを惜しみました



ロス、あなたのその微笑みを、私達は決して忘れません

## 12月誕生日の仲間たち



12月生まれ＝  
アベ、ヒトシ、ヨシハル、カズ、  
オトウ  
（前列左から）  
オク、ジョー、ヨウイチ、ヒコ  
（後列左から）



## 続・ダルク25年の歩みから

「私はダルクでなく生保で助かった？」

近藤恒夫さん講演

連載第7回

### ●ダルクの荒削りの良さがなくなる

しつこいようだけど、あくまで生活保護（費）は個人（世帯）に行くお金だ。個人がもらう公的な扶助システムだから、生保を受給している入寮者から「おれはお前ら（＝ダルク）の世話になっているんじゃない」と言われりゃ、それまで。それをダルクの施設責任者らが「おれたちが生保を掛けてやったんじゃないか」と恩を売るようになれば、それは回復なんかじゃない。

ダルクの原点は、金があろうが無かろうが、どんな立場の人でも同じ薬物依存症という病気を持つ立場の人間として回復できる権利がある、というのが基本。金で上下関係をつくったり支配したりする発想とは無縁なところから出発している。そこから初めて依存症の回復が始まる、という考え方だ。生保問題で、そういうダルクの荒削りの良さというか、依存症からの回復についてのダイナミックなビジョンが失われていく懸念を、ぼくは抱いている。

たかが生保問題でと言っちゃ角が立つかもしれないけど、そういうダルクが少なくなったことが哀しいんだ。そりゃ現場の責任者は「こんなに頑張ってるのに」って腹を立てるだろうし、大いに異論や反論があるだろう。でも、最初にお金ありきという考え方、お金がないとダルクのスタッフの給料払えないと真っ先に発想することが、ぼくには何か貧しいなあ、って思えるんだ。

だったらダルクのスタッフなんていな

くていいじゃないか、みんな外で稼いで次の人たちを手助けすればいい。そうじゃないと、ダルクらしくない。ダルクをつくった立場からすれば、そう言いたいんだ。そうじゃないと、ダルクで助かったというより、私は生保で助かった、とになってしまう。これじゃダルクとしての誇りがなくなる。ダルクをやっている意味もない。

### ●働けない演技をすればいい？

今の社会保障システムだと、生保をもらうとだんだん働く気力がなくなっていく。もともとアル中やヤク中なんて手取り早く楽に快感を得ようとする人たちだ。そういう生き方が身についている。それでなくても労働意欲を失っている。じゃあ生保もらうためにはどうするか？働けない演技をすればいいわけでしょう。働きたいんだけど、こんな大変な病気なんで働けないんだってね。

生保もらうために一生懸命に演技をすればいい、一日も早く自立したいなんて言っちゃだめ、ってね。これってアイロニカルなブラックユーモアの世界だよ。アディクションの反対は何か。インペダンス、自立だよ。（病的な）依存の反対は自立。ぼくはよく言うんだが、12ステップ読めるようになったのが回復じゃない。12ステップも読めるし、社会の中で自分たちが自立して、自分の力で新聞代や牛乳代、家賃払ったり、そういうことができるようになることが自立なんだ。ダルクにいる人もその辺りのことをもっと真剣に考えてほしい。（続く）

## ——水戸保護観察所長、荒木龍彦氏の講話NO6 ～多様化するダルク、問われる社会復帰に向けた就労支援～

### ◆アルコール問題に力を入れるダルクも

私は茨城に来て、茨城県薬物乱用研究会を開いています。ここには茨城方式があります。県精神保健福祉センター、県立こころの医療センター、茨城ダルクが連絡を取り合い、医療にかかわってくる薬物乱用者に対応するシステムです。20年も前から先駆的に始められたそうですが、課題もあります。警察側が抱えている薬物問題の人って多いですよ。警察に捕まったら、その時こそ医療につなげたいけど、保護観察所も検察庁も薬物依存の方々をつなぎきれない。そのような状況がいまだにある。司法、医療の壁を意識して解消していかなければならないと、この研究会を立ち上げたわけです。

今ではダルクも多様化しています。N Aの12ステップをやるということはあるんですけど、それ以外の運営形態では枠にはめないというのが、ダルクの良さとしてあるでしょう。ダルクと名前がつけば、全国各地どこも同じことをやっていると思いがちですが、施設長の個性に負うところも大きく、ずいぶん多様化していると思います。

例えばダルクではアルコールにも問題がある人が多いですが、アルコールの回復を支援するダルク、原型はマックでしょうね、それが静岡県にできた。日本ダルクの支援によるものです。潮騒ジョブトレーニングセンターも名前だけでは分からないですよ。でも、アルコール依存症の人たちの回復に力を入れている。この施設名は当初、山梨で使うことにな

っていたらしいですね。回復者の生活自立に向けて就労支援や職業訓練は今後の大きな課題です。

### ◆ダルクと本格的なパートナーシップを

一方で、ダルクを経た人たちのその後の歩みというものがなかなか見えないという声も聞きます。社会で、どう生活していくのか、道筋がみえないというのも課題です。そういう意味で、潮騒はアルコールの方をたくさん支援されています。造園や土木、建築、農作業などを通じて応援されています。課題となっている社会復帰を視野に入れている。

薬物問題の取り組みでは保護観察所も刑務所も頑張っています。一人ひとりにワークシートを配布し、それに刑務官が一生懸命に対応するんです。薬物問題を持つ人への指導は確実に広がってきた。保護観察所では年に5回、各2時間くらい面接しまして、検査を行い、プログラム処遇をやっているんです。一部執行猶予性というのを導入するということが決まりました。薬物問題をもっている人については3年後には、その一年を実刑で、あと二年を執行猶予とするような形になると思います。2年間の執行猶予の分には保護観察がつくことになり、そういった人への回復のプログラムについて訓練していかなければなりません。それだけに薬物乱用の問題にとっては、いろんな立場の人たちや関係機関、団体がダルクと本格的なパートナーシップを結んでいくことが非常に大事になると思っております。  
(終わり)

## 受刑者のみなさんからの手紙(潮騒通信を読んで)

### ■潮騒を通じ、仲間の力を信じる心が芽生え

わざわざ傍聴し、手紙をくださってすごくうれしく思っております。…度重なる服役、それも同じ事で、これはふつうの人が見れば異常な人間と判断することでしょう。私は数年の服役期間中に真剣に覚せい剤と向き合い、毎日そのために努力を重ねてきたつもりです。それが私の油断で、また繰り返してしまいました。私は再度逮捕された後、これ以上どうすればよいのかすごく悩んでいます。ですから栗原さんが、手紙の中で一緒に歩みませんか？ という言葉はすごくうれしかったです。…栗原さんの施設の事は刑務所のビデオだと思うのですが、拝見し、知っていたので、手紙を頂いた時には少し驚いたのですが、私自身、ダルクに大変興味を持っていたのですが、集団ミーティングというものには抵抗があり、頼ることができなかつたのです。しかし案内書を読み、他人とか同じような人達を頼っても、良いのかもしれないという気持が今はあります。 (北海道・OK)

### ■栗原施設長の激励もあり、学習に励み

潮騒通信、届いております。いつもありがとうございます。…少し私のことを伝えますが、(内緒にしておこうとおもいましたが…笑) 9月を官費にて、3級簿記の通信教育の勉強が許可になり、私が募集少人数の中を選ばれて、驚きながらも現在、頑張っています。試験に合格したら、伝えようと考えておりました。それが難しく、毎日、頭が変になりそうで大変です(笑)。

(北海道・OY)

### ■「たった一日」から『今日一日』へ変化

先日送っていただきました『この熱い魂を伝えたいんだ!』(※当施設入寮者による回復への体験談集)、早速読ませていただきました。そして前回、私が出した手紙の返事、ありがとうございました。少し気を楽に受け止めることができました。その後、施設の仕事の部署が変わり2週間を過ぎたところで、筋肉痛と闘いながら日々生活しています。意味は違うかもしれないけど『今日一日』だけは作業を頑張ろう、という感じで頑張っているつもりです。これからも頑張っていくつもりです。文章の中に『今日一日』とありましたが、私の場合、クスリのこと、先のことばかり考えてしまい、「大丈夫かな?」「また、やってしまうかな?」先の先まで考えて勝手にしんどくなったと思います。『今日一日』、そうですね。クスリに手を出す前なら、『たった一日』ですから。私でも実行できそうですが、正直なところ絶対ではありません。だから、今後も迷惑だとは思いますが、相談の手紙を出すとは思いますが、よろしくお願いします。

(北海道・ST)

### ■『潮騒通信』通じ、施設に想いを馳せ

突然届いた栗原様からの手紙から早や2年。初めは怪しいと拘置所の職員さんに相談し、友人に調べてもらったことなど懐かしく、怪しいと疑ってしまったことを申し訳なく思います。鹿嶋市内に1か所だった施設も現在では3か所に拡大し、入寮者も増えていることが、潮騒通信を読んでわかり、施設の内部をいろいろと想像しています。…出所したらまずそちらにうかがい、お話を聞かせて頂けたらと考えています。

(鳥取県・IA)



## 蟋蟀の鳴く日鳴かぬ日独居房

北海道・章三郎

独居房はテレビなどでしか見たことが無いのでその実態は解りませんが、寂しく辛い処に違いない、万物の霊長と言はれる人の世界に獄舎が必要な事も思えば悲しいことでもあります。蟋蟀は初秋から鳴く一般的な虫だがその鳴き声は寂しい、しかしその声に一時の慰めを思うのも房の宵であろう、切実な一句です。

## 行く秋の独居に住みて音たてず

北海道・章三郎

行く秋は秋も深まり霜を見る頃は冬の思いと共に秋の終りを惜しむ心ですが、この句も独居房での句か、一人静かに行く秋と過ぎた日を顧る切実な句です。「我が息の音や独居の秋深む」でも実感の句になります。

## 今日一日てふ生き方の日向ぼこ

潮騒・豊

人の生き方は夫々ながら、若い頃は夢も希望もあり明日の為に今日を生き努力もしますが、老うと一日を無事に過せば良いと思う様にもなる、冬の日向一時を夢ごちに過す中に一抹の哀れを込めた句で他人事ではない思いにもなります。何か少しでも目標を持ちたいものです。

## 仮り釈の門扉の軋み冬日和

潮騒・豊

定められた刑期の途中でも成績により仮釈放がありますが、その時の思いは如何なものか、嬉しさとこれからの生活と悲喜交々であろう。冬日和の中に門扉の軋みがそれを如実に表した一句です

## 短歌

思い切り 天を突き上げ声を張る

よいしよよいしよと 天突き体操

北海道・章三郎

## 日矢射して常陸の国の冬の朝

潮騒・豊

常陸の国は茨城県の総称で、風土記の中に、国は広くどこまでも常に陸ゆえ常陸と言う、また、倭武天皇が国を巡察され美しい泉で手を洗われた時に袖が浸ったので、浸す、、常陸になったと言う。冬の日には緯度が低いので矢の様に感じますが、常陸の国では大ざっぱになりますので「日矢射して常陸鹿島の冬の朝」ぐらいが実感の句になります。

## 影も濃く霞ヶ浦に鴨渡る

潮騒・稔

鴨は初秋に北から渡って来て毎年同じ湖沼に越冬すると言われます、その年に始めて見るのを親しみを込めて初鴨と言ひ霞ヶ浦では群も多い。この句の影も濃くと言うのは群が浦の水面に映るほどの意かも、少しあいまいですので、「影も濃く霞ヶ浦に鴨来る」の方が実感ではないでしょうか。

## 柿熟れて鳥に残すや二ツ三ツ

潮騒・稔

家の近くにも柿の木があり熟れる頃になると鴉などが早くも来て突きますが、この句の場合それはそれより先に収穫したのだが、鳥へも少し残してやる微笑ましい俳諧の句です。また、来年も生る様にと残すのを、木守柿、木守柚子とも言ひ晴天の梢に二つ残るのも美しい。

## 気のつけばもう聞こえない虫の声

群馬・友子

秋の虫は晩夏の頃から聞かれて秋の近いを知り暫くはその声を愛でますが、初冬になり虫の声も何時の間にか聞かなくなる、また冬には早いと思ひながらも。若い頃は自然への思いも浅いながらこの句は齢を思うしみじみとした俳諧の哀れを感じます。

## 鳥よりも先に摘み取る秋実り

群馬・友子

秋は稔りの秋とも言ひ稲を始め栗、柿、梨、葡萄など多くの物が実る、したがって鳥や獣等もそれを待つて食へに来る、大きく自然界を思えば生存競争かも知れませんが。憐れみを込めた俳諧の句です。「鳥よりも先に摘み取る葡萄かな」でも景の見える実感の句になります。

## しおさい文芸コーナー

選者 桐本石見

## Information

### 12月行事予定

- 16日 ファイザー助成金贈呈式（都内）
- 17日 秋元病院メッセージ
- 18日 入寮者バンド・ライブ出演（都内）
- 19日 新宿とまり木薬物・アルコール相談
- 23日 誕生会&クリスマス会
- 24日 NA北関東エリア会議（宇都宮）
- 28日 餅つき大会
- 30日 大掃除

### 1月主要行事予定

- 2日 初詣（鹿島神宮）
- 8日 秋元病院メッセージ

※発送作業簡略化のため、振込取扱票は全員の方に同封させて頂いております。どうぞご理解の程をお願いします。

### 11月 献金・献品を戴いた方々

▼献金を戴いた方 ▼献品を戴いた方  
坂西 ミヤ 様 菜の花家族会 様  
小岩井商事株式会社様 橋爪 八重子 様

☆第2回フォーラムでは、多くの方々から温情あるお祝いや御花などを頂戴いたしました。心から御礼申し上げます。

また今月も、こちらの方々のほか、匿名の皆様から献品・献金をいただきました。ありがとうございました。

今月も多くの方から献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。おかげさまで潮騒 JTC は、回復のためのプログラムを実践することができておりますことをご報告いたします。今後ともご支援くださいますよう、なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

### 編集・発行

特定非営利活動法人

潮騒ジョブトレーニングセンター(本部)

〒314-8799

鹿嶋郵便局 私書箱 34 号

〒314-0006

茨城県鹿嶋市宮津台 210-10

TEL/0299-77-9099 FAX/0299-77-9091

潮騒リカバリーホーム

〒314-8799

鹿嶋郵便局 私書箱 56 号

〒311-2213

茨城県鹿嶋市中 2773-16

TEL/0299-69-9099 FAX/0299-69-9098

E-MAIL [k.s-darc@orange.plala.or.jp](mailto:k.s-darc@orange.plala.or.jp)

潮騒JTCホームページ <http://shiosaidarc.com/>

### 編集後記

多くの関係者のご協力を得て、今回の特集ページで紹介させていただいた通り、様々な困難を乗り越えながら、無事、潮騒 JTC 第 2 回フォーラムを開くことができました。ご講演、ご挨拶していただいた講師や来賓の方々、家族会の皆様、遠方から駆け付けてくれたダルクの仲間たちに、改めて心からの感謝を申し上げます。そんなフォーラム終了とともに、潮騒 JTC に嬉しい出来事が“芽を出し”ました。2009 年春に、当施設の仲間たちがシイの木やナラのき木を切りだし、そこに菌を植え付け、当施設支援者の増古四郎様が管理する山林（250 坪）で栽培させていただいている、当施設のシイタケ圃場。ここに先月下旬から次々にシイタケ（1 面写真）が生えはじめ、入寮者たちが慌てて摘んでも追いつかないほどの驚きの収穫期を迎えています。今後、これらを入寮者が丹精込めて育てた『潮騒シイタケ?』としての加工販売も視野に、仲間一堂、胸を高鳴らせています！  
(カイ)

発行所 郵便番号一五七—〇〇七三  
東京都世田谷区砧六—二六—二一  
特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会  
（会費を含む）  
定価一〇〇円